

アメリカに「田原」を見て

井上陽平（滋賀県在住）

自然豊かな田原。幼い頃から父の帰省にあわせて訪れ、川や海で遊んだこの町は、同時に多くの移民を生んだ土地でもあった。私の祖父もまた 10 年以上の月日をアメリカで過ごしたという。今回訪米の機会があり、田原の移民について少し触れてみた。

アメリカには 1980 年代まで「在米田原人会」という組織があった。その 75 周年記念誌には約 1100 を越える人が関係者として掲載されている。彼らは田原人としての絆を「ピクニック」と呼ぶイベントで確認しあっていた。

田原は大きく、海とともに生きる漁師町の下田原と農業を中心に生活を営む上田原・佐部に分かれる。人々はそれぞれの地で得たその技術を生かしてアメリカで働いた。

私の祖父は上田原の農家の生まれであり、中西部コロラド州の農地で働いた。またロサンゼルスサンペドロ（人々はサンピードロと呼ぶ）地区の山手にも田原出身の農家が集まる地域があったという。

農業の知識を造園（ガーデナー）という形で発揮する者も多かった。ガーデナーには田原に限らず戦前より多くの日本人が就いており、戦後からは漁師からの転身者も加わり、日系人の主要な職業となった。

一方下田原からの移民はサンペドロ地区のターミナル島で男は漁師、女は缶詰工場で働いた。ターミナル島には田原出身の人が多く住む「田原マチ」と呼ばれる一角があったという。

漁師は中南米地域にまで漁場を伸ばしたが、太平洋戦争の際に多くが収容所送りとなり、工場も閉鎖されて賑わいは途絶えた。しかし戦前から多くの人の信頼を集め、戦後も最後まで漁師と

して生き抜いた浜地克祐氏や田原人会の中心人物として活動した浜崎王平氏のようなリーダーを生んでいる。

今回浜崎氏から当時の話を聞くことが出来たが、印象的だったのは食料には全く困らなかったという話だった。まずロサンゼルス海岸には田原の人々が「イソモノ」と呼ぶ小さな巻き貝が豊富にあり、田原と同様にそれを煮て食べる事ができた。さらに農家が育てた米と漁師の採った魚を物々交換する慣習があり、不足を補いあう関係があった。そのため全米に恐慌の嵐が吹き荒れた 1930 年代でさえ生活への不安はなかったという。人々は強いコミュニティ意識で大不況さえも乗り越えていた。

現在日系社会は三世～五世の代に入り、アメリカ化がすすむ。「在米田原人会」も消滅した。しかし浜崎氏をはじめまだ存命の方もおり、記録するにはぎりぎりでも間に合う。地域に住む方はアメリカにいる親類に連絡を取ったり、移住経験のある方の話を聞いて欲しい。また子どもたちは体ひとつで海を渡り、世界を生き抜いた先達の姿を学んで欲しい。田原は世界につながっていた、世界とともに生きてきた町であることを忘れないでほしい。



当時の「ピクニック」の様子

（「在米田原人会 75 周年記念誌」から）